

Title	玉鬘十帖の論
Sub Title	On Tamakazura-Jujo
Author	西村, 亨(Nishimura, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

玉鬘十帖の論

西村 亨

はじめに

源氏物語五十四帖の中でも、私の源氏研究はとりわけ玉鬘十帖に関わることが多かった。それは物語の構想と人物の造型などの問題がそれらの巻々の成立と絡み合つて複雑な様相を呈しており、その解明に心を惹かれるからである。本稿は多年心にかかつている諸問題の一端をまとめてみようと思つたものであるが、最初にお断りしておきたいのは、玉鬘十帖、すなわち「玉鬘」に始まつて「真木柱」にいたる十巻が後入の巻々であることを前提として論を進めることである。

源氏物語の成立に関しては、諸家に論があり、本論もまたそれらと無縁であることを許されないが、与えられた紙幅の中でその詳細に及んでいては、とうてい十分な論述を尽くすことが望まれそうもない。成立に関する私見は別の機会に譲つて、本論では基本的に武田宗俊氏の見解を支持し、その立場から立論していることをお断りしておく。つまり、源氏物語の第一部においては、氏の言われる紫の上系の巻々が物語の本筋であり、玉鬘系の巻々は後から補入せられた脇筋の物語であると考ええる。その後入の玉鬘十帖の中でこのような問題が考えられはしないかという提議が本論の核心

である。

玉鬘十帖の位置

源氏物語第一部は「少女」の巻あたりで大体終結に向かおうとする気分が見えてくる。光源氏の榮華はほぼ絶頂に達し、その将来の安定もまず疑いのないところと思われる。残る問題としては、こどもたちの将来があるだけであろう。

作者はそこで「少女」の巻の主題として、夕霧の問題を取り上げた。光源氏は自己の体験にかんがみて、夕霧にまず実務官僚としての実力を身に付けさせることを考える。夕霧を大学寮に入れて学問に精を出させ、元服に際しても大貴族の子弟なら当然なり得る四位・五位の位に就けずに、六位から出発させる。このことは源氏の意図を理解し得ない夕霧自身のみならず、夕霧を溺愛する祖母大宮の反撥をも招くことになる。そこで光源氏の教育論が展開されることになるが、それを含めて、さらにもうひとつ作者が力を込めた夕霧と雲居の雁との恋の話題とによって、かなりの内容量をこの巻は有することになる。

もうひとりのこども、明石の姫君に関しては、「梅が枝」の巻がその話題に当てられている。「少女」の最後、光源氏三十五歳の冬からはまる三年あまりを隔てて、光源氏三十九歳の春から「梅が枝」の巻が始まる。その間に姫君は十一歳になり、春宮への入内を控えて装束の儀が行われる。入内のための薰き物や双紙の準備がこの巻の大きな話題となっている。

かくして「藤の裏葉」の巻にいたって懸案はすべて解決する。夕霧と雲居の雁との結婚が認められ、明石の姫君の入内を機に紫の上と明石の御方との融和もなり、源氏は太上天皇に準ずる位を得る。六条院に天皇・上皇並んでの行幸を

仰ぐという栄光があり、万事めでたしめでたしという趣の中に第一部が終わる。言うまでもないことであるが、源氏物語が当初からここまでを第一部とし、第二部・第三部を予定して書かれたとは思われない。おそらくこれをもって大団円としたつもりが読者の要望もだしがたく、やがて第二部・第三部が書き継がれることになったものであろう。それはともかくとして、「少女」から「梅が枝」「藤の裏葉」という巻々の流れはそういう終結部を形成していったものと見なされる。

ところが、源氏物語成立のある段階で、この「少女」と「梅が枝」との間に玉鬘十帖が割り込んできた。玉鬘は第二部には作中人物として自由に活動するから、この十帖が割り込まされたのは、物語が第二部にかかる以前のことであり、また、玉鬘は「梅が枝」「藤の裏葉」には影をも見せないから、作者は「少女」「梅が枝」「藤の裏葉」に手を着けて混然とした物語に改編しようという意図は持っていなかったものと思われる。ただ、既成の巻の間に新しい巻々を挿入して、物語に新しい局面を加え、変化と幅とを増そうとしたものであろう。

玉鬘十帖の作者

玉鬘十帖を補入した作者の意図はどこにあったであろうか。第一に考えられるのは、光源氏の六条院における栄華の生活を具体的に描写しようとしたことである。

「少女」の巻の最後、光源氏三十五歳の八月に六条院が完成する。四町を占める広大な邸宅に妻子眷族を集めて栄華の頂上に立つ生活を送るのは「いろいろのみ」の理想であり、王朝の物語のいくつかに「とのうつり」と称すべきその主題が描かれているのを見出すことができる。源氏物語においても「少女」の巻のまさにこの個所に「とのうつり」が描

かれるのである。しかし、それは決して十分なものではない。前述のように「少女」の巻はすでに相等量の紙幅をこれまでの話題に費やしており、作者は、あとは簡略な記述で巻のとりじめを作ろうとしている。であるから、六条院の結構についても四季の町それぞれの概略を描出するのみで、それはいかにも豪華な、贅を尽くした邸宅であるという想像はつくものの、物語としての生きた描写がなされているわけではない。わずかに、紫の上に対して秋の御殿の秋の美しさを誇示する秋好中宮の挑戦を具体的な描写として、話題を後に繋いでいるばかりである。

話がこのまま「梅が枝」に続いたのでは、読者としてはいささかの不満を残すことになる。六条院の栄華の生活、この世で最高の高貴な生活を具体的に活写してほしいという思いは、物語の読者の誰もが抱くものであるに違いない。そういう要望に応えようとしたのが「玉鬘」以下の巻々補入の第一の理由であると見ることに、さほどの異議はないものと考えられる。

「少女」と「梅が枝」との間には年立の上で三年の開きが置かれている。「玉鬘」の巻以下の巻々を書いた作者は、この空白にまず光源氏三十六歳の一年を、あたかも絵巻物を繰り広げるように描いて見せようと計画した。六条院の四季、それは作者にとっても、読者にとっても、魅力ある主題であるに違いない。光源氏はこの美しい邸宅においてどんな日常を過ごすのであろうか。何を考え、何を思い、何を楽しみ、何を喜びとするのであろうか。

しかも、この有能な作者は光源氏に配するに新しいひとりの女主人公を創出した。同じく玉鬘系の巻である「夕顔」から筋を引いて、玉鬘という新しい人物が造型され、六条院の生活はこれによって一段とはなやかさを加えることになる。しかもこの女性は、物語の上でこれまでに見なかった新しい個性を備えている。これまでの女性たちが個人的な性格の違いがあるとは言え、光源氏賛美という一点においては軌を一にしていたのに対して、玉鬘という女性は光源氏の

手に負えない特殊な性格を持っている。玉鬘にとっては、光源氏といえども絶対の存在ではない。その存在の大きさがともすれば圧倒的に迫ってくるけれども、やはり自分は自分であり、納得のゆかないものは納得がゆかない。この点がこれまでの女性たちが持たなかったこの女性の自主性であり、読者にとっては初めて知るこの種の人物の個性である。

一体作者はどうしてこんな個性を創り出したのであろうか。紫の上系における作者はまったく光源氏に密着して、時々草紙地と呼ばれる文章の一角に顔を出す作者は、光源氏を取り巻く作中の女性たちと同じく、何かにつけて光源氏賛美に終始する。作者と作中人物とが視座を同じくしている。これは正しくは、光源氏賛美の心情をもつ作者が描く女性たちであるから、同じく光源氏賛美の言動を折にふれては示すことになると言うべきであろう。

ところが、玉鬘十帖の作者はこの点において大きな相違を見せている。それは「夕顔」や「末摘花」など、これ以前の玉鬘系の巻々においても同様な傾向が見られなかったわけではない。しかし、「玉鬘」以下の玉鬘十帖にいたってはつきりと特色を現すようになる。それは第一に、作者自身の光源氏に対する距離の持ち方の相違として読者に感ぜられる。ここでの作者はもはや光源氏に密着してはいない。作者は光源氏との間に相当の距離を持ち、全般においては好意的ではあるけれども、時には皮肉な目で批判的に光源氏を眺めている。

たとえば、玉鬘を見出した光源氏は親代りとして庇護を加えながら、ひそかな恋心を抱き始める。「胡蝶」の巻では光源氏が思いの一端を言い出して、わが心のうしろやすさを言い聞かせる個所があるが、作者はそこにちょっと顔を出して、

いと、さかしらなる御親心なりかし。(2)

という批評を加える。もっともらしく親ぶった言い方をしながら、都合よく自分の恋心をも宣伝する。なんて巧妙なや

り方だろうという批評である。

また、光源氏は玉鬢に対して貴族階級の男性たちが恋心を懐くことを期待する。兵部卿の宮などが心を乱して言い寄ってくる様子を見たいものだ、と紫の上に言う。その個所でも、作者は紫の上の口を借りて、

あやしもの、人の親や。まづ、人の心励まさむことを、先におぼすよ。⁽³⁾

と言わせている。娘をだしに使って男たちの心をけしかけてみようとする。そんな親がいますかという批評で、こういう源氏への批評性が随所にちりばめられていることが玉鬢十帖のひとつの特色となっている。

作者の批評精神は作中人物の造型にも影響を与えずにはおかないであろう。玉鬢のもつ自立性、光源氏への精神的な距離の取り方はこれと無縁ではあり得ないと思われる。紫の上系の巻々の作者の有する傾向がいかにも女房階級らしい貴人賛美の精神に溢れているとするならば、これはそれとは相当異質のものと言わねばならない。言うならば、隠者たちの超越的な精神傾向であろう。

「玉鬢」から「野分」まで

玉鬢という女主人公を案出した作者は、その登場に「玉鬢」一卷を費やした。それは長谷寺靈驗譚を下敷きにしたと思われる非常に伝奇的な物語であったが、長谷寺で右近と邂逅した玉鬢は、その手引きによって光源氏の六条院に導き入れられる。このあたりの作者の手腕は大変にみごたなもので、玉鬢流離の伝奇的物語を六条院の写実的な世界に融け込ませて、少しの不自然さをも残していない。そして、玉鬢はほとんど無理なく六条院の一員となって、光源氏と接しながらの日常が始まるわけである。

「初音」の巻で六条院の新年の豊かではなやかな有様を描き出した作者は、次の「胡蝶」の巻では春たけなわの春の御殿の美しさを、周到な準備をもって描き出す。春の御殿における船の楽、そして中宮の季の御読経に紫の上から奉られる豪華な献花。女の童四人で運ぶほどの大きな花瓶に、銀のには桜の枝を、金の中には山吹の枝を盛って仏前に奉り、それぞれに蝶・鳥の扮装をした女の童たちが胡蝶・迎陵頻の舞を舞いながら退いてゆく。これは去年の秋の秋好中宮の挑戦に対する紫の上の返報でもあったので、優雅な消息の応酬もある。読者を十分堪能させるだけの重量感があり、六条院の栄華を描こうという作者の目的はこの二巻だけでも十分に達せられたという感がある。

「胡蝶」の巻の後半には、ようやく六条院の生活になじんだ玉鬘に対する求婚者たちの出現が紹介されるが、光源氏自身もまた、この美しく聡明な女性の出現に無関心ではいられない。「螢」の巻は趣を変えて、玉鬘を前面に押し出し、いわば夏の恋と言うべき題材を活用する。几帳を隔てて玉鬘と対座する兵部卿の宮の眼前に突然放たれた数十匹の螢。瞬間その光に浮き出た玉鬘の容姿。螢の文字の伝統の集大成とも言うべきこういう美しい場面を案出したのは凡手のあたりどころではないが、一転して「常夏」の巻においては光源氏の玉鬘に対するやり場のない恋の苦悩を描き出す。心理的な描写に転じて、これまた効果を見せている。「篝火」の巻はそれが極限に達した状況で、活字本で数頁に過ぎない短編でありながら、読者の心にはその重苦しい印象が忘れられない。

このように物語を進めてきて、「野分」の巻はひとつの転機にさしかかったように見受けられる。すでに六条院の栄華の描写は十分に達成され、これ以上は繰り返しに陥るおそれがある。光源氏の恋も行き悩んでいる。そういう状況において、秋の何を題材として何を描けばいいであろうか。これまでの（鶯の）初音とか胡蝶、螢、常夏など、いかにも季節を代表する題材に比して、篝火が取り上げられたこともすでに少し異風であった。萩の葉風とか萩の花、動物なら

ば小牡鹿とか雁の声というような、いかにも秋らしい、和歌的な季節の美を代表する題材がないわけではない。篝火は夏の気分の方が強いかも知れない。作者自身さえも少し錯覚して、

夏の、月なき程は、庭の光なき、いと、物むつかしく、おぼつかなしや。⁽⁴⁾

と、光源氏に言わせたりしている。篝火という作者の選択はむしろ心理的な面に重点がかかっているので、光源氏の暗鬱な思いを象徴することにおいて、適切だったのであろう。

同様に、野分という題材も、和歌的な美という観点からは少し特殊であろう。古今集以来、「あらし」という用語によって和歌の題材ではあるけれども、美しい草木を吹きしおるもの、秋の美を脅かすものとして位置付けられている。その野分をあえて題名とするこの巻は光源氏の築き上げた六条院の美の世界を吹き揺るがす内容を暗示しているであろう。事実、それが光源氏の子息夕霧によるものであったとは言え、光源氏があればほどに配慮をめぐらし、また自身も油断を見せることのなかった紫の上が、生涯にただ一度夫以外の男性にかいまみられる。光源氏の六条院世界の絶対性に初めて揺らぎが生ずるのである。

「野分」の巻は「初音」に似た構造を持っていて、夕霧が紫の上をかいまみした後、秋好中宮の御殿へ使者として訪れて女房たちの様子を瞥見し、さらに光源氏に随従して院内の女性たちのもとを一巡する。その間に玉鬘をかいまみ、さらにその後明石の姫君をも覗き見る。「初音」の巻では、読者は光源氏とともに六条院のはなやかな生活の全貌を見て回ったのであったが、「野分」では夕霧の視座から院内の女性たちの美しさをかいまみる。それは六条院の栄華を描いて見せる作者の目的とも言えなくはないが、事実として六条院の秘せられた世界が暴露され、読者は不可侵の領域に足を踏み入れた印象を心に残すのである。

「野分」と「行幸」との間

これまでひとつの季節に二巻ずつを当てていた作者は、冬には「行幸」一巻だけを当てることにしたようである。「みゆき」はこの巻の冒頭の話題である大原野の鷹狩りの行幸を意味すると同時に、雪を暗示する語であるから、冬の巻の題名としてふさわしい。鷹狩りも数少ない冬の景物のひとつとして重要であろう。そして和歌の伝統から言えば、春・秋に季節の題材が多く、作品の数も偏っているものであって、『古今集』でも春秋の各二巻に対して、夏冬は一巻ずつが配当せられている。であるから、ここで冬に「行幸」一巻が当てられていること自体はさほど大きな問題ではない。

しかし、これまでの各巻が短編的な完結性をもって鮮明な印象を与えていたのに対して、「行幸」は明らかに長編的な性格を見せている。古典文学大系本で「初音」から「野分」までの各巻の平均頁数十七頁余に対して、「行幸」の三十頁はそのことを語っているであらうし、数字以上に、内容的に光源氏と内大臣双方の家庭にわたったのこまごました話題の展開は「行幸」の巻の長編性を実感させる。

それ以上に「野分」と「行幸」の間の間隙を感じさせるのが、話題の中心である玉鬘についての話の進行の不一致である。ここまでの知識で言えば、読者は玉鬘の身のなりゆきについて、概略次のような理解を有しているはずである。玉鬘に対する求婚者たちの中で優位にあるのが螢兵部卿の宮であり、光源氏もそれについては悪い感情を持っていない。ただ、光源氏自身玉鬘に惹かれていて、他人のものとしてしまうことに思いきりがつかない。いっそわがものとしようかとも思うが、かと言って紫の上に並ぶほどの愛情を持つとは、われながら思われない。それではかえって玉鬘が

かわいそうかと、そんな思案が循環して、決着がつかないでいる。「野分」の巻の最後までで言えば、事態はそういう状況にあったはずである。

ところが、「行幸」の巻が始まってみると、光源氏は玉鬘を尚侍として出仕させることに心を決めていた。それは、後には、光源氏が大宮に事情を説明することばとして宮廷からその意向が示された、すなわち帝の意志であるとされているが、⁽⁵⁾当初は紫の上に、「しかしかのこと、そゝのかししかど」玉鬘が（秋好）中宮や（弘徽殿）女御の存在を気にしてはかばかしく決断がつかない、というような話として語られる。⁽⁶⁾であるから、読者としては、光源氏が宮廷出仕のことを決意して裏面の工作をし、帝の内意が下るようにしたのだなと理解する。源氏物語の記述は常にそのような行間を読みとって納得するように書かれている。

もし帝の内意が下ってから光源氏がそれに応じる決心をしたのであれば、不可抗力に近い事態が突然出現したわけで、小説的なおもしろさは薄くなるものの、筋は通りやすいと言えるだろう。しかし、光源氏の実子であることを知り、何かにつけて光源氏を喜ばせることを心がけている冷泉院の帝が光源氏の意向を尋ねることもなしに玉鬘の宮仕えを求めるとは考えにくい。それよりも、作家としての力量の冴えを見せ続けている作者が、不可抗力によって事態が変化したというような拙劣な方法で物語の筋を操作するとは思われない。大原野の行幸を見物しに玉鬘を出立たせた光源氏が、帝を拝したならば若い女性の気持ちとして帝のおそば近く仕えてみたいという気が起こるのが当然だろうと予測することなども、これが光源氏の意向から出たことであるという証拠になるであろう。

しかし、そう考えた時、光源氏はいったいどういう考えで玉鬘を宮仕えに出立たせるのであろうか。その点について、作者は説明を避けも忘れもしていないが、光源氏の思惑と周囲の憶測との間に大きくいちがひがあると見受けら

れる。この問題に関してのひとつの難点は、尚侍としての宮仕えが、尚侍という役の特異な性格として、天子の寵を受ける可能性があるということである。ことに玉鬘のように若く美しく、家柄、後見役、どの点からも問題のない場合、その可能性は非常に高いわけで、であるから内大臣をはじめ周囲の多くがそれを既定のこのように理解している。ところが、冷泉院の後宮には光源氏を後盾とする秋好中宮と内大臣の姉娘の弘徽殿の女御がすでに毅然と控えている。その中に混じって寵を争うとなると、どちらに關しても大変おもしろくない事態を招くことになる。

この点に關する光源氏の態度は大変あいまいである。前掲の「しかじかのことを、そよのかししかど」に続いて、「中宮、かくておはす」「女御、かく又さぶらひ給へば」という二か条について、「思ひみだるめりしすぢなり」と言う。^(?)この「思ひみだる」の主語を私は玉鬘と解しているが、それが悩みの種であることについては、光源氏とても變わりはない。そして、光源氏の明確な解答はついに見られないのである。

玉鬘の人物造型

「野分」の巻までの理解をもって「行幸」の巻に對する時、読者はこういう齟齬に會わねばならない。そして、こういうギャップは作者の構想のための無理ではなかったろうかと考えられる。物語はこの後玉鬘の思いがけない運命を追って長編的な進展を見せ、「真木柱」にいたって話は髯黒大將の家庭にまで及んでゆく。玉鬘十帖は思いがけないほどに話が發展してしまつた観があるが、作者には「梅が枝」「藤の裏葉」に手をつけることなく話を收拾するという制約があつたのであろう。それが源氏物語を今日ある姿にとどめさせることになつた。

玉鬘十帖は当初光源氏の榮華の絶頂を描く目的をもって出發したが、主人公光源氏との間に精神的な距離を有する作

者は、玉鬘を光源氏に隷属せしめなかつたばかりでなく、光源氏の全盛を揺るがすような要素を織り混ぜてゆくことを考えた。おそらくそれは、話の進行に伴って次第に明らかになってきた主題で、「野分」の巻の六条院を揺るがす暴風を予兆とし、髻黒の玉鬘奪取をもって具体化したと言つていいかも知れない。巻を追つてその構想が進展するに従つて、実は大きな問題を内包していることが明らかになってくる。

玉鬘はこの十帖の終結とともに六条院の世界から消えねばならぬ人物であつた。「藤の裏葉」の完結にあずかることがないと約束せられている以上、最後には六条院を去らなければならぬ。玉鬘の人物造型と運命にはこの制約が大きく影響しているであろう。玉鬘十帖の女主人公としては光源氏と対偶し、光源氏と深い交渉を持たせねばならない。その上で光源氏の眼前から消え去つてゆくという条件はいわば難問と言つてもいい。それに応えた作者の案出が玉鬘といふこれまででなかつたような性格の設定ではないであろうか。外的条件として光源氏と繋がることを許されない以上は、心理的に、精神的に光源氏にとつての大きな存在となるほかない。玉鬘の人物像はそういう方面から造型せられたと考へてみたい。

同じように、玉鬘の身の結末も最初から宿命づけられていたと言ふべきであろう。玉鬘を髻黒によつて奪わせる劇的な結末は、もとより作者の手腕のなさしめたところであろうが、玉鬘と光源氏との間にハッピーエンドがあり得なかつたことだけは決定せられていた。考えてみれば、夕霧のかいまみも、結果としてなにも事を起こしてはいない。「かいまみ」が男女の仲の大きな進展であり、恋愛や結婚に至る物語の上の契機であること(8)から言えば、これは異例とすべきケースである。作者は夕霧というものがたい人物を用意してはいるが、ここでは事件が起こつてはならなかつたのであり、同様に「藤袴」の巻の夕霧の玉鬘に対する恋慕などもなんらかの具体的な意味を持つてはならない設定であつた。

問題とすべき個条はまだいくつかを残しているが、要するに、玉鬘十帖は結末として「梅が枝」「藤の裏葉」の状況に回帰しなくてはならないのであり、ここに描かれた玉鬘の存在をはじめ、数々の美しいイメージはいわば白昼の幻であり、物語の上に心理的な陰影の深さを加えることにその役割があったと見るのが正しいであろう。

注

- (1) 西村亨『新考王朝恋詞の研究』（桜楓社）「とのうつり」の項参照。
- (2) 岩波書店「日本古典文学大系」『源氏物語二』四二二頁。
- (3) 「玉鬘」。同右三六八頁。
- (4) 「篝火」。同右『源氏物語三』四〇頁。
- (5) 同右七六頁。
- (6) 同右七一頁。
- (7) (6) に同じ。
- (8) (1) 同書「かいまみ」の項参照。